

授業づくりのカリキュラム論的アプローチ

法政大学キャリアデザイン学部准教授 寺崎 里水

1. はじめに

教職課程で専門的に学んだ経験がなくても、いい授業とは何かについて誰でも考えるところがあるだろう。「高校の数学の先生の授業がとてもおもしろかったので、私もそういう先生になりたいと思った」などという教職志望理由はよく耳にする。では、「おもしろい授業」はいい授業といえるだろうか。あるいは、英語の学力テストの平均点が、前回よりも5点上昇したなら、それはいい授業を受けたからだといえるだろうか。

教職について専門的に学ぶ学生には「いい授業」とひとことで済ませるのではなく、児童・生徒たちがどういう学習をしたら、どういう成果を出したら「いい授業」といえるのか、具体的に考えられるようになってほしい。「授業の冒頭、今日の課題に取り組むために、どのように生徒たちの興味・関心をかき立てた方がいいのか」という、いわゆる授業のつかみの部分を工夫したり、「うまく問いを投げかけることで授業に活気をもたらしたい」などと発問の難しさを考えたりすることは、授業づくりの方法論的アプローチにあたる。授業をつくるための方法論的技法・注意点については、既にこの年報で何度か議論されているし、教科教育法や教育実習事前指導で細かく指導されるだろう。本稿の目的は、授業づくりの基礎的な考え方の1つとして、カリキュラム論からのアプローチを紹介することにある。

2. 授業をシーケンスとしてとらえる

何をおいてもまず了解してほしいのは、授

業は1回で完成するわけではないということである。指導案をつくる授業の目的は、教育実習中の研究授業などの、たった1回分の指導案の完成度を高めることではない。教員としての力量形成を図ることを目的に、1年や3年という限られた時間のなかの割り当てられた時間をつかって、担当する教科の知識・技術を不足なく伝えるための計画を練る力を養うことにある。

具体的に考えると、学習指導要領によって、各教科は年間で何時間教えなければならないと定められている。教師は、その限られた時間をつかって、学習指導要領が定めている内容に最低限ふれながら、指定された教科書を教材として用いて、生徒の教科に関する基礎的な知識・技術を保障するための計画を練らなければならない。教科書の掲載順どおりに扱う必要はないし、学校の教育目標や教科の考え方に応じて、学年をこえて内容を先取りして扱うこともあり得る。ある単元について、授業回数を4回とするのか、6回とするのかといったことも、基本的には教師にゆだねられている。学年で扱う内容量に対して時間数が足りなければ、本当は6回かけて丁寧に教えたいことでも、4回でやらなければならないと判断することもあり得る。

各学校段階での学習内容は学習指導要領によって定められているので、それを学年ごとに割り当て、さらに学期あたり、週あたり、1回あたりの授業内容を決定する。そのため、学校には必ず年間の学習指導計画があり、学年ごと、教科ごとの目標がある。したがって、教育実習のための指導案を書くにあたってまず考えるべきは、学習指導要領で定められて

いる時間数、学習内容であり、学校が定めている年間教育計画、教育目標であろう。各学年、教科がどのように学習指導計画を立てているかについても見ておくにこしたことはない。

このように、授業とは、先に教えるべき内容があつて、時間が限られているなかで取捨選択しながら、年間や修業年限というスパンのなかでどう教えていくのかを考え、計画されるものである。完成度の高い1回の授業というよりも、一定のシーケンス（意味のあるまとまり）としてとらえる必要がある。

3. 知識・技術の構造を考える

教科書の多くは単元ごとにテーマが分かれており、教師も生徒も、学習すべき内容がひとかたまりになっていることを容易に理解できる。本稿で学習内容をシーケンスとしてとらえるという場合、それとは異なり、知識・技術の構造を考える力が必要になる。

3.1. 自動車学校に通う

運転免許をとろうと自動車学校に通う場合を考えてみよう。初回からいきなりハンドルを握って運転するところから始めたのだろうか。たいていの場合、まずは車の計器やパーツの名称や機能、標識の名称、意味などを単純暗記するところから始めたはずだ。実技でも、乗車前の周囲の点検、エンジンをかける、とめるなどを経て、直進、停車など、基礎的なところから始めたのではないだろうか。自動車学校によっては、第一段階、第二段階といったように、知識や技術の内容を明確に段階化しているかもしれない。20世紀に私が経験した自動車学校の仕組みでは、仮免許の試験に合格しないと路上教習に出ることはできなかった。知識や技術がある一定のレベルに達したかどうかの検査を経て、はじめてより総合的な知識・技術が試される場に出る仕組み

になっていたわけだ。

つまり、最初は基礎的な知識を覚え、それらを用いて基礎的な技術を学び、さらにより詳しい知識や技術を習得するといったように、知識や技術は階層的な構造を持っている。ある具体的な行為をするために、どのような知識・技術が基礎的で、どのような知識・技術が応用的であるのかといった判断をする力こそが、教師には必要なのである。最終的に学ばせたいテーマについて十分に考えるために必要な基礎的な知識・技術、やや発展的な知識・技術、応用的な知識・技術をリストアップし、限られた授業時間のなかで、それぞれの習得にどれだけの時間をかけるかを考える。こうやってカリキュラムを考え、シーケンスとして授業をつくることこそ、教師のやりがいであり、能力の発揮のしどころといえよう。

3.2. ポテトサラダをつくる

自動車学校のように、ほとんどの人に知識がないことをあらかじめ想定できる場合はいいが、教育はもっと問題が難しい。料理経験がほとんどない人に対して、学校の授業でポテトサラダをつくる実習をすることにした。その人は料理経験がないだけで、ポテトサラダは大好きな総菜だ。こういう場合、どんな知識や技術が必要か、分かるだろうか。ポテトサラダのレシピをスマホでググればいいと思った人は、教師としてはいまひとつ、センスの磨き方が足りない。

ほとんど料理経験のない人の場合、ジャガイモの皮をむく、切る、ゆでる、つぶす、キュウリを薄くスライスするなど、基礎的な料理の技術を身につけることが必要だ。さらに、レシピに「ジャガイモ（中）」とあったとき、そういう人は、（中）がどのくらいのサイズなのか分からずに悩むだろう。ポテトサラダのレシピにはあまりでてこないかもしれないが、「塩ひとつまみ」「油適量」なども、慣れない

人にとっては、具体的な量が分からず混乱するポイントだ。だからといって、これがジャガイモという野菜で、などというところから説明すると、たいていの人はバカにされると感じるだろう。

要は、ポテトサラダという料理を達成するために必要な知識・技術の基本的な構成要素を見つけ、どういう要素の上にポテトサラダがあるのかを分析する力が必要なのだ。教科内容の因数分解の力といってもいい。そして、1回の授業のなかに、どこまでを盛り込むかを判断しなければならない。その計画を書き出したものが指導案の授業計画に該当する。もし、授業に出ている人がジャガイモの存在を知らなそうなら、ジャガイモの説明をする回があってもいい。私がポテトサラダ調理実習の単元を考えるなら、ポテトサラダの前に粉ふきいもの実習をおき、ジャガイモの皮むきやゆでる作業を前もって経験させておきたいところだ。ポテトサラダのジャガイモを全部つぶすのか、形が残るくらいにするのか、マヨネーズはどのメーカーのものを使うのかといったことは、その次の問題で、ポテトサラダ調理実習の本質ではない（はずだ）。

ポテトサラダから教科の話に戻ると、したがつて、シークエンスとして考えた授業のなかには、必要に応じて、年号・人名丸暗記の回や、公式をとにかく暗記して計算問題を繰り返す回があってもよい。その1回だけに注目すると単調でつまらない授業かもしれないが、シークエンスとして考えたとき、必要なこともある。単元ごと、あるいは年間指導計画の目標として、知識や技術を総合して挑む面白い授業を計画し、そこに到達するために必要な知識や技術を身につけることを目的とした反復練習に終始する授業があるのは妥当なことだ。1回の授業内での面白さやストーリーづくり引張られすぎのあまり、必ず身に付けておきたい最低限の基礎的な知識や技術を伝えることに失敗したなら、一連の授

業はいいものとはいえないだろう。

4. 診断的評価をする

このように考えてくると、もう1つ大切なことは、教えを受ける側の持っている知識・技術を正しく診断するということだと理解できるにちがいない。

4.1. 最初の診断

授業を計画し、指導案を書くとき、必ず考えなければならないのは、授業を受ける側が、これから学習する内容に関して、どの程度の知識・技術を持っているのかを確認することだ。義務教育段階の学校では、基礎的な学力を保障することがもっとも重要な課題の1つなので、これから学ぶことだけでなく、これまで学んできたことがどの程度定着しているかを測ることも大切になってくる。基礎的な知識・技術が定着していないのに応用的な事柄を伝えても理解できないし、理解できない生徒は授業の雰囲気をつくる妨げになってしまうかもしれないからだ。授業で、何を、どこまで教えられるのかは、この診断次第ということになる。

大学の授業で、初回はどうせオリエンテーションだから出ないという学生がいるが、たいていの先生はここで学生の顔ぶれをチェックし、どの程度の知識や技術（と熱意）のある人が集まっているのかを診断的に評価している。初回に出ていなくて途中から参加して、思っていたのと違ったとがっかりしたら、それは先生も同様で、初回と違った人たちがいて戸惑っていると理解してほしい。高校の場合は入学者選抜があるので、入学者は一定の水準の学力を備えていると考えられており、その水準を前提にカリキュラムを構成している。同じ高校生でも、学校や専門コースによって使用する教科書が異なっていたり、授業の進め方が異なっていたりするのはい

ことも理由になっている。

授業ごとの最初のつかみや、シークエンスの初回の授業は、こういった診断をするという意味で重要な役割を果たしている。何気ない雑談やグループワークを通して、あるいは的確な発問によって、授業の参加者が今日の授業に参加するためにどの程度準備ができているのかを評価しなければならない。

4.2. 途中の診断

指導案は、一度完成させたらそれで終わりではない。1回の授業をやってみて、どうも思ったように話が伝わらなかったとか、前回の話がまったく定着していなかったために復習に時間をとられて計画よりも遅れてしまったということが起こるからだ。教えるを受ける側の知識や技術の程度、授業についてきている度合いの判断を踏まえ、授業方法を変えたり、練習問題を補ったりしなければならない。

どの程度、授業についてこられているかは生徒の授業への集中度や、応答の具合から感覚的に判断することもできるが、一番ポピュラーに用いられ、かつ客観的だと思われるのは、小テストや学力試験だ。中高の学校種を問わず、ほぼすべての教科で採用されている。宿題として出される課題、ノートチェックなども、授業にどれだけ参加しているのか、どの程度現在までの学習内容を理解しているかを測る指標として、よく用いられている。

指導案を作成する際、伝えたいことを盛り込むのに一生懸命になりすぎて、どの程度伝わっているのか、どの程度定着しているのかといった診断をするポイントを入れ忘れることがある。小テスト作成や提出物チェックの余裕がなかったとしても、授業中の生徒の顔や態度をよく観察し、授業内容の伝わり具合を診断する余裕をもとう。教師の重要な仕事の1つに、授業内容について生徒が最終的にどの程度理解できたのかを測り、成績評価を

行うということがある。授業についてこられなかったのは生徒の努力不足だけが原因ではない。教師の側でも、教育目標を達成するための知識・技術の構造を明確にし、学習の様子を途中で診断し、必要に応じて授業の内容に変更を加えて、できるだけ多くの生徒が授業についてこられるようにする義務がある。

5. より深く授業の方法について考える

ここまで、カリキュラム論的アプローチによって、授業をつくるためのポイントをみてきた。カリキュラムの全体像を把握しないまま、1回分の授業の指導案のみを、やみくもに詳しく、完璧につくることがいかに無意味か、理解できただろうか。その指導案の内容がいかに方法論的に優れていて模擬授業で盛り上がったとしても、カリキュラム上の位置づけを見失っている指導案は、基礎的な土台のないうえに築かれた楼阁のように不安定なものなのだ¹⁾。

以下では、方法論的アプローチからはやや逸脱するが、授業の方法についてより深く考えるための視角を提供したい。教育実習事前指導の授業で指導案の書き方について、学生たちに教えるという具体的な場面を例にしよう。①指導案作成のノウハウを徹底的にマニュアル化して伝えることと、②自分で調べたり考えたりして作れと、とにかく最初は学生にゆだねることと、どちらがいい授業の方法だといえるだろうか。自分が学生だったら、どういう方法を期待するだろう。

5.1. メリットとデメリット

それぞれの方法について、メリット、デメリットを考えてみよう。

①ノウハウをマニュアル化して伝えるという方法のメリットは、圧倒的に効率よく、最低限の水準をクリアした指導案が作れることだ。マニュアルを用いた指導のいいところは、

よほどのことがない限り、学生個人の知識や能力に関わらず、ほぼ全員の学生が最低水準をクリアした指導案を書くことができるという点にある。初めにルールを明示しておけば、いちいち、あれがダメだ、これが足りないなどと指導する手間が省けるので効率がよい。なにより、マニュアルを熟読し、それにしたがうことを徹底すればよいので、学生にとっても教員にとっても省エネで、お互いの感情的しこりも少ないだろう。ずばぬけてよい指導案は出てこないかもしれないが、ずばぬけて悪い指導案も出てこない可能性が高い。

一方、②の学生にゆだねる方法はどうだろうか。隅から隅までマニュアルを読み、それに従う煩わしさはない。自分の思うように作ることができるので、一人一人の個性が発揮できるだろう。洗練はされていなくても、驚くほど発想が豊かで楽しそうな授業案ができるかもしれない。しかし、これまでの学習の蓄積がなく、これからもたいして努力する気がない学生の場合は、発想が貧困で、とても授業としては成立しないような授業案をつくるだろう。しかも、学生の気持ちとしては、それなりに時間をかけた指導案なのに、「まるでダメだ」「実習は無理かもしれない」などとダメだしを受けることによって、指導案に取り組むモチベーションが限りなくゼロに近づくに違いない。教師と学生の関係も気まずいものになる恐れがある。人によって出来がバラバラになるうえ、何度やり直しても完成度がいまひとつ低いままなら、効率という観点からも最悪ということになる。

このように考えると、マニュアルの重要性がよく分かるだろう。指導案だけでなく、授業のレポートでも、就職活動のエントリーシートでも、最初に見本を見せてほしい、何を最低限入れるべきか教えてほしい、こういうのはダメだと示してほしいという意見は多い。大学生のアカデミック・スキルのテキストはここ数年、多くの種類が発刊されているし、

就職活動のマニュアルは、本、web、大学就職担当部署のセミナーなどによって大量に生産されている。個性の発揮よりも最低限の水準を早くクリアすることが強く期待されるような場では、マニュアルを参照せず、試行錯誤しながら質を高めていくような作業が評価されにくいというわけだ。

5.2. 育てる力の違い

次に、それぞれの方法は学生のどのような学習活動、どのような力の発揮を求めているかについて考えてみたい。

①の場合、マニュアルを見て、それを適用できる力が必要である。見本を見たときに、これが求められているフォーマットだと理解し、そのエッセンスを汲み取って、正しく自分の指導案のなかに反映する力だ。昨年履修していた学生の、比較的出来の良い指導案を配布して、その内容を解説する授業があるなら、それは①の方法に近いやり方を採用しているといえる。

一方、②の場合、自分で授業をオリジナルに構想する力が必要だ。こう書くと短いが、教材に関する広くて深い知識、それらから相手の学力や教育の目的に照らして内容を取捨選択し、構成していく力、そのための根拠となる教育方法や学習心理学に関する基礎的な知識は最低限必要だ。内容がひとりよがりになってはいけないので、学習指導要領の内容はもちろん、今日の入学者選抜の方法や試験問題に関する知識なども持っていてほしい。こういった力が自分に不足していると分かったときには、授業以外で図書館などを活用して自学自習することも期待されている。

表にメリットとデメリット、育てる力を示した。どちらがいい授業といえるか、判断できるだろうか。この問いに正解はない、というのが本稿の答えだ。学生に教職に就きたいという強い思いがあって、これまでの学習の積み重ねもばっちり、かつ人数が少なく

表 教え方とメリット・デメリット、育てる力

		授業方法	
		①ノウハウを徹底的にマニュアル化して伝える	②自分で調べたり考えたりして作れと学生にゆだねる
観点	メリット	学生の知識や能力に関わらず、最低限の水準の指導案がつくれる。 効率がよい。 教師と学生の間摩擦が少ない。 ずばぬけて悪い指導案が出てこない。	マニュアルを読み、それに従う手間がいらない。 思うように作れるので個性が発揮できる。
	デメリット	ずばぬけて良い指導案が出てこない。 個性は出しにくい。 マニュアルが分厚くなる。	出来上りの個人差が大きく出てくる。 教師と学生の間摩擦が大きい。 効率が悪い。
	育てる力	マニュアルに従う力。	教材に関する知識、方法論を選択する力、教育政策の動向についての理解。 自学自習する力。

手をかけることができるなら、私は②を採用する。教師としての力量形成を考えるなら②こそ、いい授業だと考えるからだ。しかし、学生の人数が多く、教員免許は一応とりたいが教師にはなるつもりがないという者が大半の場合、教育実習を無事に乗り切ることを考え、①を採用するだろう。授業開始時の診断に基づき、判断する。どんな学生が授業を受けるのか分からないときに授業計画をたてるなら、どちらでもできるように両方の授業準備をする。

方法の選択は、それしかできないからでも、それこそが教育学的に理想だからでもなく、メリットやデメリット、育てる力などを総合的に判断して行う必要がある。近年の学校では、授業にICTを導入するのか、昔ながらの紙媒体でやるのか、体験学習を多く取り入れるのか、講義中心にするのかなど、教師の授業方法に関する選択の機会や幅はうんと広がっている。その判断の基準として、どういう力のある人に向いているのか、教師のどういった関与が求められるのか、クラスサイズや学校規模からみて適切かなど、さまざまな視点を持てるようになっていなければならない。

6. まとめ

当初考えていたよりも長くなってしまった。全文を読んだり、比喩を理解したりする力のない学生のことを考え、述べてきたことの簡単な要約と、より深い学習に向けた文献情報の提示をしてまとめとしたい。

○授業は1回ごとの積み重ねとしてではなく、学習内容を学年や学期といった固まりに割り振ったうちの1つのシークエンス（意味のあるまとまり）を構成するうちの1回として考えるべきである。準備としては、まず学習指導要領と教科書を見通し、年間の授業時間数と照らして、どのシークエンスに何時間かけるかを定める作業を行う。次にシークエンス内の具体的な内容構成を考える。これが授業計画である。

○シークエンス内の具体的な構成を考えるために、教えるべき知識・技術を構造化して理解することが肝要である。基礎的な知識・技術、やや発展的な知識・技術、総合的な知識・技術のように、知識・技術は層化しており、

1 回あたりの授業ですべての内容にふれることは不可能といえる。シークエンスのなかに基礎的な知識・技術の定着をめざして反復練習に終始する授業があるのは当たり前である。

この点について、石井（2015）の整理がとも役に立つ。石井は、能力・学習活動の階層レベルとして「知識の獲得と定着（知っている・できる）」「知識の意味理解と洗練（わかる）」「知識の有意味な使用と創造（使える）」をおき、「使える」レベルの学習機会をカリキュラムにどう盛り込むか、考察をしている。本稿の議論も石井の整理に大きく依拠している。また、知識や技能を構造化するという議論について、ブルーム（B. S. Bloom）らのタキソノミーがもっとも知られており、教職教養の教育方法論で必ず扱われている。石井も著書のなかでこれに触れている。

○どの程度基礎的なことから教える必要があるかを考えるためにも、教師は授業の始めに授業を受ける者の準備具合について診断を行わなければならない。実際に小テストなどを用いてもいいが、授業の導入部分の発問やグループワークなど、生徒との相互行為のなかで把握してもよい。また、シークエンスの途中で授業内容の定着度合いを測るための診断も必要である。その結果に応じて、授業内容は柔軟に変更されなければならない。

この点について、西岡ほか（2015）の整理が役に立つだろう。教育評価の理論や方法に関する研究は、ここ数年、アメリカの最新の研究成果が紹介されている。西岡らの整理を読むと、カリキュラムを計画したり、授業内容を構想したりする段階で、すでにどう評価するのかということが予定されていなければならないということが理解できるだろう。

○授業方法の選択は、授業を受ける者の準備具合の診断や、授業の目的など、幅広い基準に照らして選ばれるべきである。

この点に関して、授業方法が、どういう力のある人に向いているのかという観点は、現在の社会状況に照らして重要である。東京都のように小学生でも受験塾に通っている者が大半を占める地域では、塾に通っている生徒の学力水準や進路展望に応えるような授業をすることが求められる。結果として、塾に通っていないことが低学力の原因になり、家庭の経済的状況の差が学力差に結びつく構造があるとして問題視される（たとえば耳塚2013）。授業方法がどういう力のある人をメインとして想定しているかによって、格差を生み出すことになってしまうのだ。また、少し難しい議論になるが、社会学者バーンスタイン（B. Bernstein）は、体験学習のような授業方法は、反復練習のような学習内容の明確な授業方法に比べ、学習活動として組織できる層とできない層との間に階層的な偏りがあることを指摘している（Bernstein1996）。

教育実習は、教職課程で学んできたさまざまな知識をつなげ、大きな網のようにして現実を覆い、その網を通して現実に向き合っていくという経験である。教職科目で学んだことをライトセーバーのように1つ1つ武器として振りかざすのではなく、暗視ゴーグルやサーモグラフィのように、それまで見えなかった視野を与えるものとして組み替える必要がある。カリキュラム論的アプローチを用いて授業づくりをすすめながら、教職課程の学びを振り返り、足りないところを補ってほしい。

注

- 1) 実際の教育実習の様子を見ていると、実習生が担当するのは単元まるごとではなく、その一部について、だいたいこのくらいまで進んでくればよいというような曖昧な目標のもと、指定された授業時

間に数回担当する程度にとどまっている。
「結局、ここまでが目標と言われたところにまったくどり着けずに終わった」
「先生の授業を見ていたら、ものすごいスピードで進んでいて驚いた」といった学生の感想は散見されるが、評価をみると発話や生徒とのやりとりなど、方法論的な指摘が多くを占めており、カリキュラム論的な見方にもとづく授業づくりの力について具体的に議論する機会は少ないようだ。

文献

- Basil Bernstein, 1996, *Pedagogy, symbolic control and identity: Theory, research, critique* (久富善之ほか訳、2000、『〈教育〉の社会学理論—象徴統制、〈教育〉の言説、アイデンティ』法政大学出版局)
- 石井英真、2015、『今求められる学力と学びとは—コンピテンシー・ベースのカリキュラムの光と影』日本標準
- 西岡加名恵・石井英真・田中耕治編、2015、『新しい教育評価入門—人を育てる評価のために』有斐閣
- 耳塚寛明編、2013、『学力格差に挑む』金子書房